

闘争する魂——プロとして商品を売る話——

栗原 文和

坂口安吾の「散る日本」『群像』一九四七年八月号 05) (1) は、プロの将棋対局、木村義雄名人に塚田正夫八段が挑戦した一九四七年の第六期名人戦の最終局が題材になっているものの、将棋対局の観戦記とはいいたいがたいものである。対局の進行や対局者の言動が詳細に描かれてはいるものの、観戦記では重要な要素を占める対局後の検討に基づいた局面ごとの形勢分析は記されていない。

また、指し手は記されているものの、それにはさほど意味は無いと言わんばかりに対局が始まるなり手の誤記があり、また修正されることも無いまま放置されている。「塚田八段七六歩(十四分) 木村名人三四歩(三分) 間髪を入れず塚田五六歩、木村七分考へて五四歩、それから間髪を入れず二五歩、五五歩、二四歩、同歩、同飛、三二金」。将棋の棋譜が読める人ならすぐわかるのだが、「塚田五六歩」は誤っている。その次の塚田

八段の手が「二五歩」である以上これは「二六歩」でなければならぬ。しかし、この誤りは訂正されることもないまま、現在のところ「散る日本」が収められた最も新しいテキストであるアンソロジー『右か、左か、心に残る物語』(沢木耕太郎編、文春文庫、二〇一〇年)にまで受け継がれている(2)。編集にあたった人たちが初出誌や初めて収録された単行本と一致しているかが重要で、棋譜としてのつじつまには意識が向かないまま訂正されずに来たと考えられるが、ではこの誤記が「散る日本」を損なっているかと言えれば必ずしもそう言えないのである。ここでは、指し手よりも将棋にかける対局者の「魂」を描き出そうとする指向がある。唐突に出て来た「魂」という言葉については後で述べる。

坂口安吾がプロの将棋に言及するようになるのは、同じ一九

四七年に発表された「大阪の反逆」(『改造』一九四七年四月号 05)からである。その本文自体が「将棋の升田七段が木村名人に三連勝以来、大阪の反逆といふやうなことが、時々新聞雑誌に現れはじめた」「升田七段の攻撃速度は迅速意外で、従来の定跡が手おくれになってしまふ」「伝統の否定、将棋の場合では定跡の否定、升田七段その人を別に、漠然たる時代的な翹望(きょうぼう)が動きだしてゐるやうな気がする」というプロ棋士升田幸三への言及から始まり、次いで織田作之助の文学へと話題は移っていく。従来の価値観を否定し乗り越えていくことを目指すものへの注目ということで二つが並べられているのだが、「散る日本」の題材となった第六期名人戦への関心も同じところから来ているはずである。

プロ将棋の歴史において、升田幸三が名人木村義雄に三連勝した(木村・升田五番勝負)が行われた一九四六年からの五年余りは、プロ将棋界において大きな変化の時代であった(3)。世襲制の名人制度が廃止され実力制の名人戦が開催されるようになって以降十年間名人の座を守り続けた木村義雄が、塚田正夫、升田幸三、大山康晴といった新たな挑戦者と名人の座をかけて戦い続けた時期である。まずその先駆けとして「散る日本」で題材になった七番勝負で塚田正夫が木村から名人を奪取する

ことになる。坂口安吾はさらに二年後の第八期名人戦での木村の名人奪還についても「勝負師」(『別冊文芸春秋』第十二号・一九四九年八月 08)で題材にし、また「戦後新人論」(『文芸春秋』一九四九年十一月号 08)では先程の挑戦者三棋士の名前を挙げて「既成定跡はフンサイされ、架空の権威は名を失って、各棋士が独自の新手を創造することを手合いの信条とし、日常の心構えとするようになった」と書いている。

もつとも「散る日本」や「勝負師」で木村義雄が「架空の権威」として描かれているわけではなく、一方的に「既成」の権威を否定するのではなく、変革者との間の対等の闘争に強い関心を惹かれたのではないかと考えられる。対等の、とわざわざ書くのは、未発表の「陣屋事件」について論じた文章では、棋士同士の対等の対局を離れたところで動く様々な力が批判されているからである(15)。「陣屋事件」とは木村義雄と升田幸三が対戦した第一期王将戦七番勝負において、一九五二年二月十八日・十九日に行われるはずの第六局を、升田が対局会場の宿である陣屋の対応を不満として対局を拒否したことを指す(4)。その後、日本将棋連盟理事会は升田に一年間の出場停止の処分を下すのだが、それについて坂口安吾は「将棋レンメイは勝敗を判定すれば足りるのだ。それ以外に裁く権力も理由も

見出せないではないか」「一年間の出場停止とはベラボーナ話さ。一日の出場停止ですら、おかしいね」「碁将棋は三大紙にとつては紙面の一部分の問題にすぎないが、棋士たちにとつては生活全部の問題なのだから、もっと真剣な自分の声を持つのが当然であろうに、まるで自分の声をもたない人形のようにしか考えられません」と述べている。この文章の中では、日本将棋連盟という組織やスポンサーである新聞社という「権威」の前に為す術もない将棋のプロ棋士達の姿が浮き彫りにされている。

どうやら坂口安吾にとつては、何かが権威であることそれ自体よりも、闘争を回避し対等の関係で対峙しようとしなない姿勢にこそ批判の力点があったようだ。

プロ将棋界は江戸時代から続く世襲制の名人を頂点として組織が作られており、明治以降になっても名人が認可する段位によつて対局料などの待遇や平手で指すのか駒落ちで指すのかという対局の際のハンデ（手合い）も決められていた。たとえ、年齢を重ねて将棋の実力そのものが落ちた棋士でも一度高い段位に付けば同じ待遇が維持されていた。この制度こそがまさに「架空の権威」であり、それはまず先述の実力制の名人戦であり、また一九四六年に創設された順位戦だった。これは、棋士

をA級からC級までのクラスに分けて総平手のリーグ戦を行い、たとえ一度八段に昇段した棋士でも成績が悪ければC級にまで落ち、それに伴つて待遇が下がるという制度である。実際の運用ではクラスを上げにくくかつ一度上がると下がりにくい部分があるのが問題とされることもあるのだが、基本的な精神としては対等の条件による闘いとその結果に基づいた待遇で一貫しており、現在にいたるまで実力すなわち対局結果に基づいた権威が維持されてきたのである。

これに対して「陣屋事件」の元となった王将戦は、後で述べるように名人戦・順位戦の主権を朝日新聞に奪われた毎日新聞が始めたタイトル戦であり、七番勝負で大差がついた際には負け越した側はハンデをつけられて対局をするのを強いられることになる。同じ全棋士参加のタイトル戦である名人戦と差別化するための企画なのだが、その発想は全てハンデ無しの順位戦を基盤とする名人戦と異なるものである。しかし、毎日新聞をスポンサーとして維持するためにプロ将棋界は王将戦を受け入れ、その結果生じたのが「陣屋事件」なのである（注）。

このスポンサーの問題は先の引用にあるように「碁将棋」では「生活全部の問題」なのだが、この時期のプロ将棋とスポン

サーである新聞社との関係は以下のようなものであった。

一九四六年 東京日日新聞（現在の毎日新聞）主催で順位戦が開催される

一九四九年 一九三五年の創設以来実力制名人戦を主催していた東京日日新聞から朝日新聞に主催が移る。

一九五〇年 読売新聞が九段戦（全日本選手権戦）を創設（後の十段戦、現在の竜王戦）

一九五一年 毎日新聞が名人戦にかわって王将戦を開催する

新聞社は読者の関心を引くために競い合って人気プロ棋士の対局の観戦記を掲載するべくスポンサーとなり大型のタイトル戦を主催している。棋士の対局料や賞金のほとんどは主催者であるスポンサーの出資金によってまかなわれ、この時代から半世紀以上経った現在も新聞・雑誌・テレビ局・ネット企業などが様々な棋戦のスポンサーとなっている。

さらに先程まとめたプロ将棋のタイトル戦を巡る「三大紙」の競争は、一九七六年毎日新聞による名人戦主催の奪還、一九八八年読売新聞による名人戦と並びかつ序列一位とされる竜王

戦の発足、二〇〇七年名人戦の毎日新聞・朝日新聞の共催への移行というようにこの後も続いていく。いわば新聞社の勢力争い、メンス争いに巻きこまれる形で戦後のプロ将棋の歴史は進んできたわけである。もちろんその競争によって、プロの将棋により高い価値が見出されるということもあるわけだが。

このような全国紙によるタイトル戦の他にも、坂口安吾が「坂口流の将棋観」「観戦記」（いずれも一九四七年 06）で取材している『神港夕刊新聞』『九州タイムズ』などが主催した一九四七年の木村升田三番勝負のような地方紙による対局も行われていたが、同様に現在も東京新聞・北海道新聞などの有力地方紙グループが主催する王将戦や、共同通信社主催で様々な地方紙に配信される棋王戦と言ったタイトル戦が開催されている。

プロ将棋とは棋士やその組織だけで存在できるものではなく、対局の記録を独占しようとするメディア企業との関係によって成り立っている世界である。徳川幕府をスポンサーとした家元制度と世襲の名人制度によって成り立っていた将棋指したちは、アマチュアの指導や免状の発行による収入に加えて、対局の棋譜を自ら雑誌として発行する、すなわち出版産業に参入することで生き残りをはかった。必ずしも、雑誌の運営自体は

うまくいったとは言いがたいのだが、それは現在将棋連盟が発行している『将棋世界』誌に受け継がれている。その一方で、社主である黒岩涙香が十三世名人小野五平と親しかった由縁で『万朝報』が将棋の棋譜の掲載を始めるようになり、他の新聞社もそれに続いていく。近代のプロ将棋界は雑誌・新聞といった出版メディアの発展に伴って隆盛を極めてきたのである。

その点は囲碁も同様で、坂口安吾は「本因坊・呉清源十番碁観戦記」(『読売新聞』一九四八年七月八日・九日 06)や「碁にも名人戦つくれ」(大阪版『毎日新聞』一九四九年五月二九日 07)で繰り返し、将棋の名人戦・順位戦のような全棋士参加の実力制のタイトル戦によって囲碁の人気を回復することを訴えているのだが、そのような棋戦を開催するためにはやはり新聞社の後援が必要なのである。現在は読売新聞主催の棋聖戦、毎日新聞主催の本因坊戦、朝日新聞主催の名人戦が三大タイトルと呼ばれている。

そして出版メディアとの関係が不可欠であるのは将棋や囲碁だけではなく。坂口安吾の言葉を借りれば、「小説は、たかゞ商品」(「大阪の反逆」)なのであり、小説を含む文学作品の買い手は読者である以前に直接には新聞社・出版社といったメディア企業である。そして、この最初の買い手に買われなければ、

更にその向こうにいる新聞や雑誌そして本の買い手である読者に小説が読まれることはない。もちろん、プロ将棋の棋士達が自ら雑誌を作っていたように、自分たちで同人誌を作ったり、菊地寛の文藝春秋のような出版社を創設し、作品を売ることもできるかもしれないが、それにしても読者に「商品」である小説を買わせることに変りはない。また、産業として市場で競争し大規模化し続ける新聞社や大出版社の影響力を無視することはやはり困難である。

坂口安吾は「大阪の反逆」において「小説は、たかゞ商品」という言葉の後に「そして、商品に徹した魂のみが、又、小説は商品ではないと言ひきることのできるのである」という一文を続けている。彼が将棋や囲碁に関心を持ったのは、対局は「商品ではないと言ひきることのできる」「魂」を求めてのことだったのかもしれない。前に引用したように「大阪の反逆」の冒頭ではプロ棋士升田幸三を「伝統の否定」「定跡の否定」する者として評価しているが、これは升田に新聞社や読者を喜ばせるだけではない、次の引用のような「思想家」としての側面を見出しているからだにとらえることができる。

文学者が戯作者でなければならぬといふ、その戯作者に特

別な意味があるのは、小説家の内部に思想家と戯作者と同時に存して表裏一体をなしてゐるからで、日本文学が下らないのは、この戯作者の自覚が欠けてゐるからだ。戯作者であることが、文学の尊厳を冒瀆するものであるが如くに考へる。実は、あべこべだ。彼等の思想性が稀薄であり、真実血肉の思想を自覚してゐないから、戯作者の自覚も有り得ない。戯作者といふ低さの自覚によつて、思想性まで低められ^れ差められるが如くに考へるのであらう。

当時のプロ将棋界の状況と重ね合わせて考えると、「思想家」とは文学・芸術・文化の「伝統」や「定跡」といった実力を伴わない「架空の権威」の批判者、その問い直しを行う闘争者のことになる。升田幸三は「陣屋事件」の後も闘争を続け、五年後の一九五七年には「三大紙」が主催する全てのタイトルを獲得し三冠王となるのだが、その頃坂口安吾は将棋について書くことは無くなつていた。

さて、ここまでプロ将棋界についての坂口安吾の関心を、彼の小説観と重ねつつ述べてきたのだが、いや安吾と言えれば将棋より囲碁ではないか、という違和感を感じた人もいたかもしれ

ない。

確かに、囲碁との関係は「大阪の反逆」でのプロ将棋への言及よりもずっと早く、「囲碁修行」(『都新聞』一九三八年六月二十一日〜二十三日 02)や「古都」(『現代文学』一九四二年新年号 03)で京都滞在中に「囲碁倶楽部」という碁会所と関わっていたことを書いているし、東京に戻ってから碁会所に通っていたことが「市井閑談」(『都新聞』一九三九年五月六日〜八日 03)で語られている。また、プロ棋士団体である日本棋院が発行していた雑誌『囲碁クラブ』に「負け碁の算術」(一九四〇年十一月号 15)を、棋士の安永一が編集主幹を務める『囲碁春秋』に「生命拾ひをした話」(一九四〇年一月号 03)を寄稿してもいる(03)。

ただ、実際にプロの囲碁対局を題材に書いたのは「本因坊・呉清源十番碁観戦記」『読売新聞』(一九四八年七月八日・九日 06)が最初で、将棋に比べて一年ほど遅い。おそらくこれはプロ将棋よりもプロ囲碁の方が全棋士が対等の条件で対局する実力制への移行が遅かったことと関係しているのではないかと考えられる。この観戦記の少し前に発表した「ヤミ論語 大衆は正直」(『世界日報』一九四八年三月二二日 06)では将棋の隆盛と囲碁の不振について述べ、囲碁にも名人戦を作るべ

きことを主張している。翌年発表したその主張そのもののタイトル「碁にも名人戦つくれ」(『毎日新聞』一九四九年五月二九日 07)(注)では、「昨日の名人もひとたび棋力衰えるや平八段となり時にBC級へ落ちる」「実力第一人者を争う名人戦」に支えられた将棋の人氣に對して、「碁の方は忘れ去られた淋しさ」だと述べている。「本因坊という一家名を争うことがすでにコッケイであり」「実力第一人者を争うギリ／＼の勝負でなければ決して天下の人氣をわかすことはできない」と続く発想は、既にプロ将棋に關して述べていた際のものと同じである。

この時期のプロ囲碁の状況について簡単にまとめると(5)、世襲制最後の名人である本因坊秀哉が一九三四年に引退した後、実力制の本因坊戦が発足したものの、プロ将棋の順位戦のような段位を成績によって有名無実化するような制度を作るにはいたらず、また段位の違う対局者の間では置き碁と呼ばれるハンデ戦を行うというのも戦前と変わっていなかった。また、大手新聞社が人氣棋士の話題となる対局を掲載しようと鎬を削っているのは将棋と同様で、『毎日新聞』がスポンサーである本因坊戦、『朝日新聞』がスポンサーである昇段を決める大手合が行われ、またそれらに對抗して正力松太郎社長率いる『読

売新聞』は一九二八年の来日以降高段者を倒し続けてきた中国出身の呉清源を社の囑託として、様々な有力棋士との十番勝負の企画を仕掛けていた。とはいえ、実力的には誰もが第一人者と認める呉清源は、一九四七年の時点で本人も知らないままに日本棋院から離脱させられており、その後は無所属の「名誉客員」として対局をしていた。そのため十番勝負でどのような結果を出そうとも権威であるタイトルを獲得するわけではなかった。その点は三大紙が実力制による三大タイトルで競ったプロ将棋界とは異なる点であった。

プロ囲碁の現状に不満を抱いているからか、坂口安吾の関心は将棋以上に対局の帰趨以外のものに向いている。先述の「本因坊・呉清源十番碁観戦記」は本因坊薫和(岩本薫)と呉清源の十番勝負の第一局を題材にしたものであるが、先程述べたような事情の中、「実質的に、名人戦である。呉氏が勝つや、囲碁第一人者は、中国へうつる」ことをおそれず対局を受けた本因坊薫和と、新興宗教「壘宇教」の信者である呉清源にとって、合理的な思考を必要とする囲碁の棋士であることがいかに両立できるのかということを専ら語っている。後者については、「太宰治情死考」(『オール読物』一九四八年八月号 07)、「呉清源」(『文学界』一九四八年十月号 07)、「囲碁・人生・神様」

(文藝春秋、一九四九年七月号 吳清源・川端康成・豊島与志雄・火野葦平との座談会 17)、「明日は天気になれ 珍試合の巻」(『西日本新聞』一九五三年二月六日〜十日 13)でも繰り返し言及している。そこに何らかの「魂」の探究を見出したかったのかもしれない。

ここまで述べてきたような出版メディアと囲碁・将棋の関係については、別に坂口安吾だけが述べているわけではない。先程名前をあげた座談会「囲碁・人生・神様」の参加者の一人である川端康成の「名人」(一九五四年)、本因坊秀哉が木谷實八段と対局した引退碁を題材にした小説の中に次のような記述がある。

すべてせせこましい規則づくめ、芸道の雅懐もすたれ、長上への敬恭も失はれ。相互の人格も重んじないかのやうな、今日の合理主義に、名人は生涯の最後の碁で苦しめられたと言へぬでもなかった。(略)

将棋の名人争奪戦に見られるやうに、覇権の意味がおもになり、名人の位が優勝旗のやうな名称になり、競技を興行する者の商品になるだらう。実は名人もこの引退碁を、前代未

聞の対局料で、新聞社へ売ったと言へるかもしれないし、名人が進んで出たよりも、新聞社に誘ひ出された方が多かったのかもしれない。(略)

昔は名人になると、名人の権威に傷がつくのをおそれて、稽古はしても手合ひは避けたものらしい。(略)しかし、今は打たない名人など、存在をゆるされないだらう。(6)

名人を「苦しめ」「ゆるさ」ないのは「合理主義」というよりも、読者を獲得するために報道しやすさや勝敗・強弱のわかりやすさを求めるメディアである。たとえば新聞社が読者の心を惹くために棋士に報道に都合のいい条件を求めてくる。これは坂口安吾も述べていたことと同様であるが、多くの読者の存在を背景にしたメディアの力と名人の築き上げてきた「芸道」「芸」が対立する時代になったと、ここで語り手の「私」は語っている。

しかし、それは囲碁と出版メディアの関係の歴史から目を背けた発言でしかない。現実の名人はこの対局のずっと前から自らの碁を「対局料で、新聞社に売っ」ていたのであり(7)、「私」の語る「芸道」は既に「架空の権威」でしかなく、おそらくずっと前に失われたものである。ここで語られているのは「私」

の芸術にかけた夢であり、そこに「名人」が小説として書かれた由縁がある。

「偶像」を「破壊する心」の先に「魂」を求めた坂口安吾と、「名人の権威」「芸道の雅懐」の存続を夢見た「私」を描く川端康成。おそらく芸術・文学が置かれた状況に対する認識は共通している二人は、しかしそれに対する処し方は大きく異なっていたようだ。

(二〇一五年七月三十一日 稿)

注

- (1) 坂口安吾の引用は全て筑摩書房版『坂口安吾全集』(一九九八年～二〇〇〇年)による。本文中の二桁の算用数字は『全集』の巻数を表す。
- (2) この誤記については『坂口安吾全集16』(筑摩書房、二〇〇〇年)の「散る日本」取材メモ」についての解題がようやく指摘している。
- (3) これ以降のプロ将棋の制度やタイトル戦の歴史についての記述は升田幸三『名人に香車を引いた男 升田幸三自伝』(朝日新聞社、一九八五年)、東公平『近代将棋のあけぼの』(河出書房新社、一九九八年)、川口俊彦『大山康晴の晩節』(飛鳥新社、二〇〇三年)、

『マイナビムック 将棋名人戦——昭和・平成時代を映す名勝負——』(マイナビ、二〇一四年)、日本将棋連盟公式サイト <http://www.shogi.or.jp/> を参考にしている。

- (4) 升田幸三は「陣屋事件」の背景に「名人の権威を失墜させる」ことを狙った王将戦への不満があったことを、後に『名人に香車を引いた男』(前出) で書いている。

- (5) これ以降のプロ囲碁の制度や歴史についての記述は林裕『現代囲碁大系別巻 現代囲碁史概説・現代囲碁史年表』(講談社、一九八四年)、菊池達也『木谷實とその時代』(棋苑図書、一九九九年)、水口藤雄『図説 中国文化百華 第14巻 真髓は調和にあり 呉清源 呉の宇宙』(農村漁村文化協会、二〇〇三年)、中山典之『昭和囲碁風雲録』(上・下)(岩波書店、二〇〇三年)に基づいている。
- (6) 引用は『川端康成全集第十一巻』(新潮社、一九八〇年)による。引用に際して旧字を新字にあらためた。
- (7) この点については前出の『現代囲碁大系別巻』『木谷實とその時代』を参照のこと。